雑誌『愛』を知りませんか
—室生犀星未収録原稿「芙萸」をめぐって—

文学科学科長　教授　井　上　　謙

室生犀星　大森馬込の自宅にて

近畿大学の中央図書館には貴重な稀覯本がかなりあり、古活字版の中でも豊富な挿し絵のある秀頼版「帝鑑図説」、海外交流史や日本の文化を研究する上で必要なデ・サンデの「天正遣欧使節見聞対話録」、嵯峨本の「伊勢物語」など、研究者にとってはそれこそ身震いするような魅力ある資料がぎっしりと保管されている。こうしたことは関係方面にもよく知られ、わたしも一応承知していたが、なかなか訪ねるチャンスに恵まれなかった。それが縁あって、この四月から増設された文芸学部の一員として赴任したことで、それらの稀覯本に直接ふれる機会を得、思いがけぬ出会いをしたのである。

館に案内され、噂に違わぬ珍本貴本を目のあたりにしたわたしが、まず興味を持ったのは大きなガラスケースに保存されている華岡青洲の弟子が使った医療器具一式とその日記であった。青洲は世界で最初に全身麻酔による手術を行った外科医で、有吉佐和子の「華岡青洲の妻」で一躍有名になり、有吉の舞台劇で最も息の長い作品となっている。わたしもＮＨＫ文化センターの月例講座で取り上げており、有吉のふるさと和歌山市が近大から二時間足らずなこともあっていっそう有吉の文学が身近かに感じられていた折りも折り、青洲ゆかりの手術器具と日記を眼前にしたのである。しかもその日記は今なお翻刻されていないというから、わたしの好奇心はますます高まった。どんな生活臭がそこから出てくるか。それによって有吉作品の解明に何等かの助けとなるかも知れない。そのうちゆっくりとその世界を覗いてみようと、仲間の村瀬憲夫助教授と翻刻を楽しみにして次ぎへと足を運んだ。

ところがここで思わぬ資料に出合うことになった。室生犀星の生原稿である。図書館の久保遊亀江さんが犀星の原稿を持って来て、調査してほしいとのことである。原稿は赤茶けていたが、升目にきちんと記された丸みのある文字は明らかに犀星特有の筆跡なので抑え切れない興奮を覚えた。とっさにこれが未発表原稿であったら大変な財産だと思った。原稿を見ると挿し絵画家川端弥之助の名前がペン書きされていたり、『愛』という雑誌に発表された記録がメモされているので期待は裏切られたが、問題はこれが『全集』あるいは作品集に収録されているか、それとも未収録なのかを確かめない限り、その価値を云々することはできない。そこで東京に戻るや国学院大学の院生松寿敬君に協力してもらって調査を始めた。

原稿は「芙萸（ぐみ）」という短編で、二百字詰めの原稿用紙で三十枚、最後の用紙の三行目で終わっている。現在犀星の著作を点検できる資料として刊行されているものは(1)全集、(2)作品集、(3)年譜・書目などであるが、二種類の『全集』（非凡閣版・全十三巻別巻一・昭

「芙萸」　犀星直筆原稿

11－12、新潮社版・全十二巻別巻二・昭39－43）には収録されていない。作品集としては新潮社版作品集・全十二巻（昭33－35）、『室生犀星句集魚眠洞全句』（北国出版社・昭52）、『定本室生犀星全詩集』全三巻（冬樹社・昭53）、『室生犀星童話集』全三巻（創林社・昭53）、『室生犀星全王朝物語』全二巻（作品社・昭57）などにも未収であり、改題・改稿の形跡もなかった。また、『室生犀星文学年譜』（室生朝子・本多浩・星野晃一編・明治書院・昭57）、『犀星書目集成』（室生朝子・本多浩・星野晃一編・明治書院）および『室生犀星未刊行作品集』既刊八（奥野健男・室生朝子・星野晃一編・三弥井書店・昭61）などを調査したが、該当する作品や作品名は見当たらなかった。

「芙萸」が雑誌『愛』に掲載されたことは原稿に記された割り付けメモなどから明らかであるが、肝心の掲載誌は現段階では不明である。犀星資料を収集している金沢の石川近代文学館に問い合わせても、小説「芙萸」ならびに雑誌『愛』はなく、東京駒場の『日本近代文学館所蔵主要雑誌目録』（昭56・4現在）にも『愛』の項目はない。そのため、現在『室生犀星未刊行作品集』を編集されている室生朝子氏に直接お聞きするのがよいと考えて連絡したところ、快く承諾され、お会いすることができた。

朝子氏は犀星の長女で犀星の代表作『杏っ子』のモデルである。「確かに父の筆跡ですし、この作品にふれたのは初めてなので、とてもありがたかった」とよろこばれ、持参の『室生犀星文学年譜』を広げながら執筆時期を推定された。「芙萸」は「仙造は今年六十歳になってゐた」という冒頭文から判断して、「戦後の作品で、おそらく疎開先の軽井沢で書いたものか、その生活を切り上げて東京の大森馬込に帰ったころ前後のものと思う」といわれ、「これは明らかに作品集未収録作品の原稿です」と判定された。年譜によると、犀星が軽井沢に疎開したのは昭和十九年で、その二年前に永年の友萩原朔太郎と佐藤惣之助、師北原白秋を失っているので軽井沢の冬はことのほか厳しい心境にあった。

「ふるさとは遠きにありて思ふもの」で知られる犀星は大正七年に詩集『愛の詩集』を自費出版してから約半世紀にわたって詩、小説、俳句、評伝、童話、随筆など多彩な作家として活躍したが、疎開当時は必ずしも恵まれていたわけではない。「氷らざるものなく／氷れるもの悉くまがれり」（『旅人』）とうたい沈黙を余儀なくされた時代である。そして敗戦。昭和二十三年に日本芸術院会員となり、朝子氏が結婚。鬱々とした日々にやっと光が射し始めたが、自ら「本のない男」と自嘲するように戦後の犀星は不遇であった。犀星の蘇生は昭和三十年代であるが、それまでは随筆集『泥孔雀』一冊しか出していない。その苛立ちや失意の心境は昭和二十三年三月三十日から書き始めた犀星日記（新潮社版『全集』別巻１、２収録）に詳しく、今回調査している原稿「芙萸」の執筆はちょうどその時期に重なる。つまり、失意の中で蘇生を心にひめて模索呻吟している時期の作品である。

とすれば作中で「これは一体どういふ種類の文学で現はすべきものであらうか、詩で行くものか、俳句で行くものか、また先刻から書き綴って来たかういふ文章であらはすべきものか」と問うているのは、文体の選択ということだけはなく、これまでの軌跡の反芻とこれからの模索がそこにあったとも思われる。その意味で「芙萸」は身辺に材を取った私小説的な小品であるが、戦後の犀星を考える上で見落せない作品であり、かつ犀星の個性の多くがその文章や描写に散りばめられている点で犀星研究の文献として一級資料と見てよいであろう。

作品の内容は六十歳になった仙造が梅雨時の風景から少年時に出会った娘たちを回想する話で、淡々として一見随筆風なタッチであるが、作品の構成と内容からすれば軽妙な筆さばきで描かれた一篇の小説と見るべきであろう。

登場するのは弁護士、米屋、飴屋のそれぞれの娘たちで、回顧のきっかけは弁護士の娘に庭の芙萸を取ってやったことから始まる。しかし、仙造の記憶に刻まれた娘たちの印象は淡くはかない。米屋の娘は子供臭いと歯牙にもかけていないが、その娘が彼と同郷で夭折した作家島田清次郎と関わりがあったことから娘への意識が蘇る。飴屋の娘はのちに身売りしたことで多少あわれさを覚えるものの、心は動かず、娘が家に男を連れて来たことから仙造の意識に娘の切ない運命が強い残照としてやきついている。とはいっても、これもまた仙造には娘であって娘でなく、女であって女でない存在にすぎない。結局、仙造の心に今なお鮮烈な美しさとして忘れられないのは弁護士の娘で、仙造から芙萸を受け取った娘の手のひらの明るさと赤く熟れた芙萸であった。芙萸の実について犀星は、

> ぐみの実は大きい方だつたから、柔らかい乳くびほどの実の肌には、白い胡麻つぶよりもつと細かい、砂のやうな白いほくろがついていた。柔らかさではどういふ果物も、ぐみの実よりも柔らかなものはなかつた。

と、描写しているが、ここには芙萸を通して女の熟れるころ、娘ざかりが鮮やかに象徴され、詩人犀星の清純なロマンチシズムを見る思いがする。いわばこの作品は白秋から玄冬に至らんとする男が青春を回顧しつつ、記憶や瞑想の中で光るもの、鮮明に残る理想世界を芙萸を通して描いたいわば犀星の心象風景であろうか。作品の末尾は、

> 人は死に馬も死ぬ。娘達のいづれも死に絶えてしまつてるか、それとも、老いてボロをつづつてるだらうか。仙造の文章を綴るがごときものに似てるかも知れないのである。記録にのこるやうな人達は滅多にないが、仙造のごとき仕事をえらんだ人間のまはりだけが、悲しくそれに記されることになるのである。

と結ばれているが、「芙萸」の境地を執筆時期と重ね合わせて読んでみると、この作品の存在価値は自ずと定まってくるであろう。それにしても、『愛』という雑誌はどこに在るか。姿のない『愛』を求めて情報の提供を待つことしきりである。この生原稿が縁となってわたしは犀星の愛娘朝子氏との縁ができ、本学の図書館との繋がりも深くなったような気がする。今年は犀星生誕百年に当たるから、この結縁も犀星の導きによるものであろうか。

（国文学専攻）

Rights were not granted to include this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

室生朝子氏　1989, 5, 31　大森山王ホテルにて